

新聞を教育にどのように生かせるか

上田市立第三中学校 長尾恭照

1 はじめに

本年度、私が勤務する上田市立第三中学校は、NIE 研究指定校に選ばれた。今年度より2年間、NIE の研究と実践に取り組むことになる。本年度は1年目にあたる。

私は、社会科教師として、これまで自分が行う授業の中で新聞を資料として使うことは度々あった。しかしそれは、授業の導入の場面で扱うことがほとんどであった。例えば、地理「世界の諸地域」のヨーロッパ州の単元で、EU について学習した後、イギリスの BREXIT についての記事を授業冒頭で示したり、歴史の「太平洋戦争」の授業において、ミッドウェー海戦での損害を大本営が隠し、あたかも日本軍が勝利したかのように書かれた記事を授業冒頭で示したりした。どちらも、新聞を通して

- ・その時の日本や世界の置かれた状況や雰囲気を味わってもらうため（新聞の写真）
- ・いかに当時の人々に大きなインパクトを与えたかを味わってもらうため（新聞の見出し）

に活用していた。そのため、主に第1面の見出し、写真、リード文を私または生徒が読み、出来事の概要をつかませるのみで、追究の資料として使うことはなかった。なぜならば、次の点で新聞記事を資料として扱うのは難しいと感じていたからであった。

- ・字数が多く、子どもが読み取るのに抵抗感を感じるのではない
- ・文中に出てくる用語が難解なものもあり、内容を十分に理解するのが難しいのではない
- ・文字数に対して写真や図、イラストが少なく、子どもが内容を理解するのが難しいのではない

しかし、今年度、NIE 研究指定校に選ばれたことを機に、新聞を社会科の授業にどのように生かせるのかを研究しようと考えた。以下は、研究1年目の実践である。

2 教育における新聞の効能

NIE のホームページによると、新聞を教育に生かすことで、次のような効果があることが報告されている (<https://nie.jp/about/>を参照)。

(1) 学力が向上する

統計によると、新聞に日常的に触れる子どもは、学力が高いことが報告されている。一定時間読書に取り組んだ子どもと、同じ時間新聞を読んだ子どもを比較したところ、新聞を読んだ子どもの方が、学力が高まっている。また、NIE を日常的に実践している学校ほど、全国学力・学習状況調査の点数が高いことも報告されている (<https://nie.jp/research/survey/#:~:text>を参照)。

(2) 信頼できる情報源である

昨今は SNS の急速な発達により、子どもたちは SNS の情報に多く触れている。10代の子どもたちが最も多く触れる情報源は SNS であり、新聞は最も下位であった。

例えば、授業後の生徒との会話において、

「今、岸田政権が〇〇なんだって」

「先生、今、日本が置かれている状況は、◇◇らしいですよ」

このような声が生徒から聞かれることがあった。その情報は、私が判断するに、正しいと思うものもあれば、事実からはちょっとずれている、偏っていると思える情報もあった。私が、「へえ、よく知っているね。すごいね。それ、どこからの情報？」と聞くと、

「TikTok で流れてくるんです」

「YouTubeで見ました」

という声が返ってきた。それらの情報を、生徒は批判的にみている場合もあるが、私が見ている限りにおいては、生徒はそれらの情報を素直に信じていると思える場合の方が多い。

なぜならば、本校の生徒の中でテレビをよく見ている生徒は半分ほどであり、YouTubeなどの動画視聴サイトを利用する生徒はクラスのほぼ全員である。LINEをはじめ、InstagramやTikTokなどのSNSに日常的に触れている生徒もほぼ全員である。彼らにとっては日常生活の情報源はスマホやタブレットからの情報がほとんどであり、それ以外の情報源に触れる機会は少ないため、生徒の多くはそれらの情報の真偽を十分に確かめずに信じている場合が多い。

しかし、SNSは誰でも情報発信ができるため、時に正確ではない情報も瞬く間に拡散される。熊本地震の際、動物園からライオンが逃げたというフェイクニュースがツイッター（現「X」）で拡散された。2024年1月1日の能登地震においても、官房長官が記者会見で「不正確な情報の流布は現に慎んでいただきたい」と述べていることから、SNSの情報の信憑性は疑問符がつくものもある。

しかし、テレビや新聞など、いわゆるマスメディアにおいては、情報は主に取材をした記者からもたらされる。その情報はデスクによって吟味された上で発表される。そのため、SNSに比べて情報の正確性が高いと考えられる。特に新聞の情報は信頼性が高く、総務省による「令和3年情報通信白書」においても、最も信頼性の高いメディアとして新聞が挙げられている。

（3）その他に考えられる新聞の効能

私自身は、教育に新聞を生かすことで得られる効果を、次のように考えている。

- ・自分の知りたい情報以外の未知の情報や、掘り下げた情報など、幅広い知識を得られる
- ・記者やデスクの目を通った、信頼性の高い情報が得られる
- ・世の中で、その瞬間に起こっている、現在進行形の情報に触れられる
- ・たくさんの文字を読み、内容を理解しようとする中で、読解力や判断力を高められる
- ・社会科教師の視点から見て、学習した内容がそのまま新聞に出てくることが多い（特に公民）

以上のことから、教育の分野で新聞を活用することは、大きな成果があると言える。

3 現在の生徒と新聞の関係

日本の新聞の購読者数は、年を追うごとに減少している（<https://www.pressnet.or.jp/data/circulation/circulation01.php>）。本校でも、今年度NIEの公開授業を行った3年3組（在籍33名）での新聞購読者数は13名であった。日常的に新聞に触れる生徒の数は決して多くない。

その理由としては、次の点が考えられる。

（1）情報化社会の実現

現在、テレビはもちろんのこと、パソコンやスマートフォン、タブレットから多くの情報を得られる。様々なニュースサイトやニュースアプリ、SNSから、無料で多種多様な情報を得ることができる。テレビやインターネットメディアの速報性においては新聞を上回る。そのため、購読料を払って新聞を購読する世帯が減少していることが、生徒が新聞から離れる一因になっていると考えられる。

また、パソコンやスマートフォン、タブレットを使って情報を得る際、我々は検索エンジンを使う。その場合、自分が欲しい情報を得ようとする。その反面、自分が欲しい情報以外の様々な情報には目を向けなくなる。新聞は、欲しい情報以外にも様々な情報が載っており、我々はそれらの情報に時間と労力を費やして目を向けようとはしないのではないだろうか。お金と時間と労力をかけて、知りたいと思っていない情報に目を向けることは、多くの人が「コスパ」と「タイパ」が悪いと感じており、それが新聞の購読者数の減少につながっているのではないかと考えられる。

(2) 字数の違い

スマホやタブレット、パソコンの画面は、新聞に比べて格段に小さい。画面に提示される文章量は少ない。いきおい、視聴者にとっては情報が限定されているため、読みやすい。

新聞は、大きな紙面にたくさんの文字が並ぶ。そのため、読むのに時間がかかる。生徒の中には、たくさんの文字が並ぶ新聞を見ると、その文字の多さに、新聞を読むことに対して拒否反応を起こす生徒も多い。

以上2点の理由から、多くの生徒が新聞を読まなくなっているのではないかと考えられる。

4 新聞を授業に生かす取り組み

今年度、NIEの授業に取り組むにあたり、新聞を授業に取り入れるためには、まず生徒に新聞を読んでもらわなければならない、新聞に親しんでもらわなければならない、と考えた。そこで、次の3つのことを行った。

- ① 新聞閲覧台の設置
- ② 新聞のスクラップブックの制作
- ③ 授業冒頭での新聞記事の活用

以下、詳細を述べる。

(1) 新聞閲覧台の設置

3年生の社会科・公民でNIEの授業を行う予定だったため、3学年の廊下に閲覧台を設置した。木製の閲覧台1台に1紙、長机にその他の新聞を設置した（予算の関係で閲覧台を増やすことはできなかったため、次年度には紙製の閲覧台の購入を検討している）。

全紙に目を通す生徒はほとんど見られなかったが、新聞を読む生徒の中で、信濃毎日新聞は比較的多くの生徒が読んでいた。特に、高校野球で甲子園に出場した上田西高校野球部のニュースや、WBC（ワールドベースボールクラシック）で活躍した横浜 DeNA ベイスターズの牧秀悟選手（長野県中野市出身）の記事は、多くの生徒が見て話題にしていた。



(2) 新聞のスクラップブックの制作

授業を行う3年3組では、自由課題としてスクラップブックの制作に取り組んだ。自由課題としたのは、家庭で新聞を購読している生徒が少なかったこと、学校に届く新聞の部数が限られていたためである。スクラップブックには、信濃毎日新聞のスクラップブックを使用した。このスクラップブックは、記事の添付とともに、その記事について思ったことや感じたことを記入できるようになっている。スクラップを制作したら、授業の際に提出するようにし、提出した生徒にはその日のうちにコメントを入れて返却した。また、折に触れてスクラップの好例を生徒に紹介した。

継続して提出し続けたのは3～4名と少数であったが、各種スポーツで成果を上げたスポーツ選手の結果や特集、興味を抱いた地域の出来事（例：地元の果物を使ったワインの特集、日本の農業の未来についての特集など）、社会科の授業で学んだ内容が載っているもの（例：日本の食料自給率の低下、内閣の動向、国会で話し合われていることなど）に



ついでにスクラップを制作していた。そのコメントは、既習事項を交えたものや、生徒自身が感動したもの、勉強になったと感じたものであった。その内容は既習事項をきちんと理解したうえで書かれたものであった。

(3) 授業冒頭での新聞記事の活用

日々の新聞の中で、既習事項に関連した記事や、私が興味をもった記事を授業冒頭で紹介したり、記事を配付して思ったことや感じたことを記入したりする活動を折に触れて行ってきた。新聞を日常的に読んでいる生徒はもちろん、普段ほとんど新聞を手にとることのない生徒にも新聞に触れてもらい、新聞を読むことに慣れるとともに、新聞を読むことの楽しさを知ってほしいと思ったからである。

これまでに扱った記事は、ジャニーズ事務所の人権侵害、島根県の AI によるマッチング、イスラエルによるガザ侵攻、藤井聡太氏の将棋タイトル八冠独占などである。記事を配布し、感想を書き、小グループで共有する、という流れで行っている。難しい内容は分からなくても、思ったことや感じたことを書くことで、記事の内容に目が向けられると思い、このような流れで行っている。簡単な感想になってしまう生徒もいるが、記事の内容に目を向け、既習事項と関連させた感想を書く生徒もいる。今後も定期的に行っていきたいと考えている。

幾つか実践例を載せる。

【『県も期待 成婚数向上の秘密兵器』朝日新聞, 2023 年 9 月 17 日, 朝刊

「少子高齢化」と関係させて「自分だったら、AI によるマッチングを利用するか？」】

- ・多分利用する。最適な相手を探してくれるなら効率的だと思うから。(N 生)
- ・利用する。使ってみて、結婚に役立つならやってみたいと思ったから。(K 生)
- ・利用しない。好きな人は自分で見つけたいし、時間をかけて、自分の力で結婚したい。機械に自分の人生を預けたくない。自分の幸せは自分でつかみたい。(M 生)
- ・利用しない。今まで関わりのなかった人と交際するのは嫌だから。AI に自分の人生を決めてほしくない。将来、相手とうまくいきそうにない。取り繕う人もいるかもしれない。(M 生)
- ・利用しない。たとえ AI で価値観が似ている人を見つけても、その人がもしかしたら自分を魅力的に見せるために良く取り繕っているかもしれないし、本当の心の内は分からないから。(K 生)
- ・利用しない。AI に支配されている感じがあまり好きではないから。(年齢によっては使うかも)(H 生)

少子高齢化は、既に地理で学習してきているため、生徒にとって考えやすい内容であった。

このような取り組みがある、ということを知ってもらい、少子高齢化の現状を多面的にとらえてほしい、と思って取り上げた。普段はなかなか授業に意欲的に取り組めない生徒も、この記事について思ったことや考えたことを記入していた。

【『過激動画で再生回数稼ぐ』読売新聞, 2023 年 9 月 18 日, 朝刊「公共の福祉」の学習で紹介】

- ・最初は発信している方も見ている方も、面白いと思い、非常識な行為をして生活していたが、やり続けると自分は得しないんだな、と思った。何事もほどほどにするのが一番だ。(M 生)
- ・人に評価されなかったり、収入を上げたいからといって、不適切だったり、誤ったことを SNS で発信するのは自分勝手だと思った。(中略) 正しく利用しないといけないと感じた。(Y 生)
- ・炎上系の動画が伸びるからと規約に違反するような動画を投稿してしまうほど、インターネットでお金を稼ぐのは簡単で危ないことだと思った。(K 生)
- ・お金欲しさに過激な動画を撮る人が結構いそうだなと思った。「相手の気持ちが気にならない」という発言にびっくりした。(R 生)

記事で取り上げられているユーチューバーの名前は、多くの生徒が耳にしたことのある人物であった。そのため、授業終了後もこの記事について会話をしている生徒がたくさんいた。

受け取る側の事情や気持ちを考えずに表現することが良くない行為であることを、全員の生徒が理解していたが、今回の記事を通して、より具体的で身に迫るものとして感じている姿が見受けられた。

『『爆撃は離れた場所だ。大丈夫だよーおびえる我が子にうそをついた』』

朝日新聞, 2023年11月2日, 朝刊「平和主義」と関係させて「日本はどちらを支援すべき？」

- ・どちらでもない。一番被害を受けているのはガザ地区の住人で、住人が望んでいることは戦争が終わること。もしハマスを応援してイスラエルのガザ地区への攻撃がおさまったとしても、戦争が終わるわけではないと思う。(N生)
- ・どちらでもない。今のように大きな戦争が起こる前からイスラエルがハマスの人たちを差別していたこともよくないし、それが嫌だからといってハマスが武力で攻撃することもよくないと思ったから。どちらも悪いので、どちらか一方を応援できない。(K生)
- ・どちらでもない。最初にミサイルを撃って人質をとったりしたのはハマスだけど、何も関係のないガザ地区に住んでいる人たちを殺すのは、イスラエルもやりすぎなのではないか？と思った。どちらも悪いと思うけど、どちらを応援するべきかは分からない。(中略)イスラエルもハマスも、民間人を巻き込むのではなく、自分たちだけで話し合ったりすればいいのと思った。どっちも悪い！(A生)

多面的・多角的な見方や考え方もつきっかけになればと、「どちらを支援すべきか」と発問したが、どちらにも非とすべき行為があり、すべての生徒が「どちらでもない」と答えていた。ガザでのハマスとイスラエルとの戦闘は、20世紀のイギリスのいわゆる「二枚舌外交」(フセイン・マクマホン協定とバルフォア宣言)、アメリカが後押ししたイスラエル・ヨルダン条約など、様々な要因が絡んでおり、生徒たちがその全容を理解するのは難しいが、「戦争は良くない」「人を殺すことは何があっても良くない」「話し合いで解決できないのか」という人道的な考えから生徒はコメントしていた。

5 NIEの授業実践「マスメディアと政治」

(1) 単元名 現代の民主政治と社会 第1節 現代の民主政治「マスメディアと政治」

(2) 単元設定の理由

授業のねらいは、マスメディアの役割と、それが政治に与える影響とは何かを考えることであった。まず、マスメディアは世論の形成に役立っていること、同じ出来事でもマスメディアの取り上げ方によって人々の受け止め方は違ってくることが、昨今のSNSの発達により、マスメディアからの情報を吟味して批判的に読み解くメディアリテラシーが必要であることを学んだ。そして、複数の新聞記事を読み比べ、受け止める印象を比較し、なぜそのような違いが生まれるのかを話し合う中で、生徒のメディアリテラシーを高めようと考えた。

(3) 本時で扱う記事に寄せた教師の願い

本時では、マスメディアの情報を批判的に読み解く「メディアリテラシー」について理解し、メディアリテラシーを養うための学習活動を行った。具体的には、①世論形成のためにマスメディアが果たしている役割について理解を深める②同一のテーマに対する2社の新聞記事を読み比べ、どのような違いがあるのか、なぜそのような違いが生まれるのかを考え、意見交換をし、考えを深める、という活動であった。扱った記事は、2023年8月15日の産経新聞1面に掲載された「首相は核抑止の重要性語れ」という論説文と、同日の信濃毎日新聞社説「戦争の正体を見極めねば」である。

産経新聞の記事の主旨は「ロシアがウクライナに『核の威嚇』をちらつかせ、中国と連携を深める現在、日本は核抑止力を持ち、中ロの脅威に対抗すべきだ」というものである。

信濃毎日新聞社説の主旨は「平和には核兵器が必要という核抑止論に依拠すれば、軍拡は果てがな

い。戦争に関わった人、遺物や遺構、戦争について語った言葉にふれて、戦争とは何かをもう一度きちんと認識すべきだ」というものである。

2つの記事を読み比べることで、生徒は以下のことに気づくことができるのではないと考えた。

- ・ 新聞社によって、同じテーマでも主張や情報の扱い方に違いがあることに気づく
- ・ 新聞社は、読者が自分たちの論調を支持することをねらって記事を書いていることに気づく
- ・ 広い視野をもって世の中の情報を正確に読み解くためには、複数の記事を読み比べて「これは正しい記事なのか」「他の視点からはどのような記事が書かれているか」「より正確な情報は何か」ということを考え、情報を批判的に読み解くメディアリテラシーの大切さに気付く

終戦記念日は、新聞各社は戦争と平和についての記事を掲載している。戦争反対と平和の希求というテーマは各社とも共通しているが、平和を達成するには何が必要か、どんな行動が我々に求められているのかについては、新聞各社によって主張が異なる。

新聞各社の意見の相違が比較的分かりやすく、生徒がメディアリテラシーを身に着けるうえで記事の比較がしやすいことから、今回の記事を採用した。

(4) 授業の考察

下記は授業を終えた後の生徒の学習カードである。生徒たちは信濃毎日新聞と産経新聞の主張の違いを読み取ることが概ねできていた。

- ・ 「(信濃毎日新聞は) 誰かの実体験を聞いているみたい。(産経新聞は) 政治に対する意見」
- ・ 「(信濃毎日新聞は) 『～ない』で終わっていることが多い。(産経新聞は) 『～した方がいい』『～してもらいたい』と頼むような口調が多い」
- ・ 「(信濃毎日新聞は) 政府に、というよりは、新聞を読んでいる国民に対して、核の危険さを訴えている感じがした。(産経新聞は) 政府に対して『核兵器のない世界は核抑止論ではつくれな』と訴えていた」

また、「なぜ、このような違いが生まれるのだと思いますか」という問いに対しては、

- ・ 「みんな同じ考えではないから」
- ・ 「書く人が同じではないし、どちらかにかたよってしまうといけないから」
- ・ 「それぞれ考えていることが違うから」

という答えが多かった。

まとめでは、

- ・ 「マスメディアはいろいろな情報源があって、いろいろな意見がある。それを読み取る力、メディアリテラシーを身につけることが大切」
- ・ 「いろんな人がいろんな意見を持っている。それを様々な角度から読み取る力が必要」
- ・ 「どんなに正しくても疑うことは大事だなと思った」
- ・ 「マスメディアはそれぞれに様々な意見が書かれていて、それをそのまま信じるのではなく、批判的立場に身をおき、読み取るメディアリテラシーが必要である」

このような記述があった。

学習カードの記述を見る限りは、生徒たちはメディアリテラシーの大切さを理解できたのではないかと感じた。

ただし、授業後の授業研究会では次のような意見が出された。

- ・ 本単元は政治分野なので、最終的には主権者教育につながる。選挙についての記事を扱った方がよいのではないか。
- ・ 従って、戦争についての記事は、別の所で扱えばよかったのではないか。語句が難しいところもあった。

- ・ **文章量が大変多いため、新聞の見出し、リード文、写真を読み取らせるとよいのではないか。**
- ・ **生徒に、新聞が面白いと思ってもらいたいし、資料として使ってもらいたい。この授業だけではなくて、単元で力をつけてほしい。そして、取り組んでいただいている「新聞の日常化」を続けてもらいたい。**

どの意見にも納得であった。論説文を2つ読み、違いを読み取る活動は、記事の字数が多いため、読むことに抵抗感をもつ生徒が出てくることが考えられる。見出しやリード文、写真であれば、どの生徒も意欲的に読み、思ったことや感じたことを書いたり、友だちと情報共有をしたりすることができるだろう。

全ての生徒が新聞を身近に感じ、新聞を活用するためには、単元計画に沿って新聞を活用するとともに、見出しやリード、新聞の構成についても学び、生徒が必要感をもって新聞を活用できるようにしなければならないと感じた。また、目指すべき生徒像は何かを考え、学校の教育目標と照らし合わせながら、新聞をどのように社会科学習に取り入れることができるかを検討したい。

6 終わりに

来年度も NIE の研究と実践が行われる。今年度取り組んだ、授業の中に新聞を積極的に取り入れる活動を来年度も継続したい。加えて、来年度は新聞記事の読み取りだけでなく、取材や編集も含めて新聞記事の制作に取り組みたいと考えている。例として、地理分野「身近な地域の調査」で、身近な地域の良い点と課題を取材やインタビューを通して調べ、記事を作成する活動が考えられる。その際、ICT を活かした記事の作成や情報共有にも取り組めるだろう。その中で、生徒たちが既習事項を生かしながら、社会的事象を多面的・多角的にとらえる力も養うことができる。新聞を購読している家庭が減少している中、教師が意図的に新聞を活用していくことで、生徒が学力を向上させるとともに、社会的事象に興味をもち、深く理解することにつながると思われる。社会の公民科は新聞が活用しやすい。今後も、新聞を学習の中で日常的に活用できるような取り組みを進めたい。